

ことばを学ぶ メカニズム

認知科学からのアプローチ

今井むつみ
Imai Mutsumi

【新連載】第1回

ことばの意味を「知っている」 とはどういうことか

✿ ことばを使えるとは？

私たち大人は膨大な数の単語を知っている。ことばを知っている、ということは当然その意味を知っている、ということである。しかし「ことば(単語)の意味を知っている」ということはどういうことなのだろうか。「知っている」ことばは必ず実際にコミュニケーションで使えるのだろうか？

実際に使うことができることばの意味とはどういうものかは、母語よりも外国語のことを考えたほうがわかりやすいかもしれない。外国語ではことばを自在に使ってコミュニケーションを取ることは難しい。多くの人は、それは「知っていることば」が少なすぎるからだと考える。外国語の習熟度の測定では、辞書の語義を与え、多肢選択の形で複数の語の候補から語義に合うものを選ぶという形式のテストが一般的だ。正しい選択肢が選べれば解答者はその単語を「知っている」と判断されるわけである。

では、多肢選択のテストで正しい意味を選ぶことができる単語を非常に多く知っていれば外国語は自在に使うことができるだろうか。ここでちょっとしたテストをしてみよう。

問1：“wear”の意味として正しいのは以下のどれか。

- ①着る ②脱ぐ ③巻いている

問2：以下の文が英語として正しければ○，正しければ×をつけよ。

- ① Get up and wear your clothes right now!

- ② I really like the hat you are wearing.
- ③ Many high school students wear a uniform in Japan.
- ④ He always wears cologne at work.

問1で①を選んだ人は問2の①で○をつけたのではないだろうか。実は問1の①は不正解である。②はもちろん×で、問1の正解を選択肢から選ぶなら③である(ちなみに①は「着ている」なら正解)。問2の正解は①が×、あとはすべて○である。

日本語では、身につける対象によって、帽子やヘルメットは「かぶる」、靴下や靴、ズボン「履く」、マフラーは「巻く」、メガネは「掛ける」などと言いつける。しかし、英語は身につける対象によって違う動詞で言い分けをしない。靴下も、帽子も、アクセサリーも、メガネも、はたまた化粧や香水まで wear する。だから②～④はみな○なのである。

しかし、日本語と英語が決定的に違うところがある。日本語は「着る」という行為と「着ている」という状態を別の動詞で言い分けることはせず、動詞語尾によって違いを表現する。

つまり私たちの認識の中では「着る」と「着ている」は「同じ動詞で表現される同じ種類の事象」である。しかし、英語では、身につける行為と何かを身につけている状態は「違う動詞で表現されるべきまったく異なる事象」なので、英語話者にとって問2の①の状況で wear を使うのはあり得ないのである。この状況は put on という句動詞で表現する必要がある。英語では「身につける」という衣類に特化した動詞はなく、シールを

机に貼る状況と衣服(やその他身につけるアイテムなんでも)を着る状況は、同じように、非常に一般的な put on ですませてしまう。

日本人の大学生を対象に問2のようなアンケート調査をした。調査に協力してくれた人たちは wear という単語を「知っている」と言ったにもかかわらず、正答率は非常に低かった。とくに、①を○、②と④を×と答える誤答が目立った。

つまり、大学生たちが「知っていた」のは、wear の意味ではなく wear の意味として辞書の項目のトップに書かれていた日本語訳だったわけである。日本人には外国語の難しい文献を読むことができて、話したり書いたりするのは苦手という人がとても多いが、その原因はほとんど、辞書の語義を覚えても、その語の本当の使い方が理解できていないことにある。

これに似た例をもうひとつあげよう。英語の hold や carry という動詞は、人がモノを手で持つか、体のどこかで支える行為を指し示す。動作主が静止していれば hold、動いていれば carry である。図にある様々なモノの持ち方は、英語ではすべて carry で表すが、日本語は「持つ」「担ぐ」「背負う」「抱く」「載せる」「掛ける」「掲げる」など7つほどの動詞で区別する。韓国語は5つの動詞で言い分ける(図点線部)。中国語は体のどの部分で支えるか、どのように持つかで、さらに細かく言い分ける。一方、英語はこれらを非常にざっくりとまとめてしまい、まったく区別しない。しかし、動作主がモノを持って静止しているか、移動しているかは区別している。

✿「点」としての意味、「面」としての意味

つまり、このような日常的で、「目で見てわかる」ような、非常に具体的な意味を持つと思われる動作においても、言語によって、動作をどのようにまとめたり、区別したりするかが大きく異なる。「持つ」と carry のように母語と外国語で、辞書では訳語として一見対応すると考えられている2つの単語でも、実は重なっているのは一部分で、境界は異なる場合がほとんどである。

しかし、外国語を学習するとき、なかなかそのことに気づかず、母語と外国語の単語を使う範

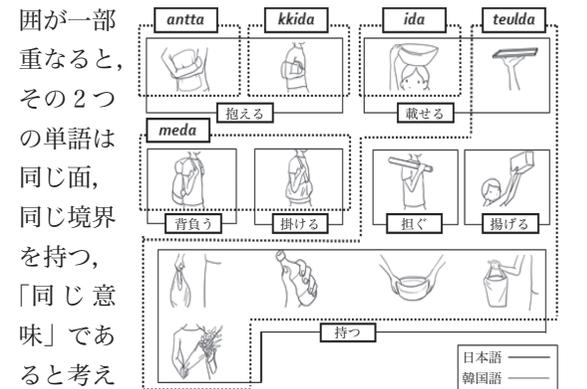


図 日本語と韓国語の動詞の意味範囲の違い

囲が一部重なると、その2つの単語は同じ面、同じ境界を持つ、「同じ意味」であると考えってしまうことが多い。実際、日本語あるいは韓国語を母語とし、中国の大学で学んでいる大学生に、これらの使い分けがどのくらいできるかを調査したところ、使い分けは中国語母語の3歳児程度のレベルで止まってしまっていたことがわかった。

辞書の定義を覚えていて多肢選択問題では正しく選べるという意味の知り方と、実際にそのことばを「使える知り方」は大きく異なる。前者の知り方は「点としての意味」を知るだけだが、実際にことばを使うためには「面」としての意味を知らなければならない。単語の意味は単語単体では決まらず、それぞれの意味領域の中に属する一群の関連する単語同士の間で決まるからである。

言い換えれば、コミュニケーションをとるためにことばを「知る」ということは、意味の地図——これを語彙のシステムといってもよい——を持ち、その中で、それぞれのことばの場所が面としてわかるということだ。「知っているけど使えない」外国語の単語は、ほとんどの場合、点として「覚えている」だけで、意味の地図の中で他の単語との関係を理解しておらず、使い分けができないので使おうと思っても使えないのである。

(慶應義塾大学教授)

◆参考文献

- 今井むつみ・針生悦子 (2014) 『言葉をおぼえるしくみ：母語から外国語まで』ちくま学芸文庫
- 今井むつみ (2010) 『ことばと思考』岩波新書
- 今井むつみ (1993) 「外国語学習者の語彙学習における問題点—言葉の意味表象の見地から—」『教育心理学研究』, 41, pp. 245-253